

2 0 2 4 年度

湘南白百合学園中学校
入 学 試 験 問 題

国 語

1 教科入試 6 0 分

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

○受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

一 後の問いに答えなさい。

問一 次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

① 家族の無病息災を願う。

② ファッションは十人十色のよさがある。

③ のるか反るかやってみよう。

④ 荏柄天神には紅梅が咲いている。

⑤ 「教うるは学ぶの半ば」ということわざ。

⑥ ヒキこもごもの人生がある。

⑦ 入試の合格発表がアイツぐ。

⑧ 今までの体制をサッシンする。

⑨ チュウヤを問わず営業する。

⑩ 経済にとってよいチヨウコウが見える。

問二 次の①～③の意味を表す言葉（二字の熟語）を、後の漢字を組み合わせそれぞれ答えなさい。

① 自分の認識の対象となるすべてのもの。外界・自然などのように心の外にあるもの。

② 他に比較するものがないこと。他から何の条件も制限も受けないこと。

③ 一定の時間内にできる仕事の割合。あることをするのに費やした力や時間に対する効果。

習	観	知	率	徳	異	対	未
差	絶	則	主	原	客	学	能

問三 次のア～カについて、読み手にしっかり伝わる望ましい文にするために、特に直した方がよい部分をふくむものが四つあります。それらをすべて選び、記号で答えなさい。

ア わたしの好きな食べ物は、海鮮類と肉とホタテです。

イ 昨年の夏は連日暑い日が続きましたが、わたしは体調をくずすこともなく元気に過ごしました。

ウ わたしは来週フランス留学することを担任の先生に伝えます。

エ Kアリーナ横浜で行われたコンサートは、はなやかで大変すばらしかったです。

オ わたしの考えでは、政府の地球温暖化対策は不十分だと主張したい。

カ 「オズの魔法使い」の主人公が自分の履いていた銀の靴によって困難から救われたように、私たちも人生の困難に直面したときは、まず自分の身近にあるものに目を向けてみるのが大切です。

問四 次の①～④の作者の作品にあてはまらないものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 松尾芭蕉 まつおばしょう ア 「おらが春」 イ 「おくのほそ道」 ウ 「野ざらし紀行」

② 夏目漱石 なつめそうせき ア 「こころ」 イ 「三四郎」 ウ 「春と修羅」

③ 芥川龍之介 あくたがわりゅうのすけ ア 「鼻」 イ 「小僧の神様」 ウ 「蜘蛛の糸」

④ 川端康成 かわばたやすなり ア 「金閣寺」 イ 「雪国」 ウ 「伊豆の踊子」

問五 次の新聞記事を読んで、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。

見出し①

紙の本と電子書籍のどちらが読みやすいかを小中高生に尋ねたところ、小説や図鑑、辞典などは「紙の本」を選ぶ傾向にあることが、全国学校図書館協議会の学校読書調査でわかった。

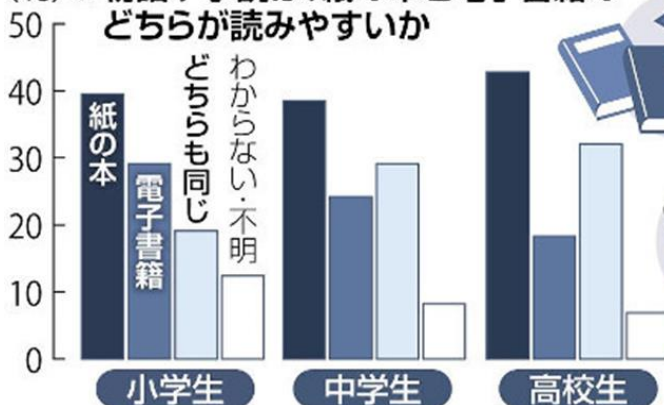
調査は6月に実施し、全国128校の小4～高3計1万812人が回答した。

電子書籍の読書経験がある4900人に「紙の本と電子書籍のどちらが読みやすいか」を聞いたところ、物語や小説は「紙の本」が小学生39.5%、中学生38.5%、高校生42.8%で、「電子書籍」「どちらも同じ」を

②。図鑑や辞典・事典も「紙の本」だったが、マンガは「電子書籍」が読みやすいと思う割合が③。

群馬大の柴田博仁教授(認知科学)は「内容をきちんと理解したい図鑑・辞典や、想像力を働かせながら読む小説は、④読める紙の優位性を感じているのだろう」と分析した。

(%) ◆ 物語や小説は、紙の本と電子書籍のどちらが読みやすいか



(1) 見出し①にあてはまる最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア

小説・図鑑「電子書籍」で
学校読書調査小中高生支持

イ

小説・図鑑「紙の本」で
学校読書調査保護者支持

ウ

小説・図鑑「電子書籍」で
学校読書調査小学生支持

エ

小説・図鑑「紙の本」で
学校読書調査小中高生支持

(2)

②

③

にあてはまる最もふさわしい組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

ア ②上回った・③高かった

イ ②下回った・③低かった

ウ ②上回った・③低かった

エ ②下回った・③高かった

(3)

④

にあてはまる最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ページを拡大しながらしつかり

イ ページを行き来しながらじっくり

ウ 文字情報を直感的にすばやく

エ 絵や文字の情報を手の感覚をとおしてじんわり

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部省略しています。また漢字を一部ひらがなやカタカナに直したり、送りがなを一般的な表記に改めたりしています。)

《森田ミツは^{*1} ハンセン病の疑いで、御殿場にある療養施設の病院で隔離生活をしていたが、精密検査の結果、ハンセン病の診断は誤りであることが判明する。》

二時の汽車ならば、今からでもたっぷり時間はあった。その汽車で東京に戻ってから、どんな所に住み、どんな仕事をするのか見当もつかなかったが、今は悦びが不安など圧倒していた。

患者たちが少しずつ集まってきた。①ミツが退院するというニュースは敏感な彼等の耳に次から次へと伝わりはじめたらしい。

「森田さん。退院するんだってな。」

いつか、ヒヨコを追いかけていた中野さんが足を曳きずりながら、そばに寄ってきて、

「よかったじゃねえか。」

「うん。」素直にミツはうなずいて、「有難と。」

「退院ときまったら、何時までもこんなところにいるもんじゃねえよ。」

「でも、これからさ、どうしようかと考えてんの。」

「なんでも出来るさ。 ^{*2} 娑婆がつれえって言ったって、ここよりは、ましにきまつてるもんな。」

中野さんはそう言って自分の屈曲した指に眼を落としながら寂しそくに笑った。

その時、ミツは病舎の幾つかの窓からこちらを向いている幾つかの眼を痛いほど感じた。

それは女の患者たちの眼だった。細目にあげた窓から女子患者たちはまるで今朝とはうって変わったような強張った顔でミツをぬすみ見ている。

その眼には ^{*3} 羨望と敵意さえ感じられる。ミツがふりおいた瞬間、大きな音をたてて窓をしめる者もいた。急にたち上がって窓から離れていく者もいた。自分たちに決して与えられなかった倅せをただこの森田ミツが受けるのが、彼女たちには理解できず、許せなかったのである。だが、中には中野さんのように寂しそくにこちらを凝視している年輩の患者たちもいた。諦めと ^{*4} 忍従とがその皺のふかい顔にきざみこまれている。

「さあ、早く、部屋に戻って仕度しましょうね。」

^{*5} スール・山形は病舎の微妙な雰囲気を感じとって、急いでミツをこの場からつれ去ろうとした。

部屋に戻ると、加納たえ子が窓から洩れる日差しの中かで刺繍をやっていた。ミツの発音に気づくと顔をあげて、

「おめでどう。よかったわ。」

一生懸命、笑顔をみせて退院を祝福してくれた。しかしたえ子の笑顔が一生懸命であればあるほど、その裏側に、とり残される者の辛さと哀しみがあらわれてくる。

「悪いわ……」

ミツは畳の上に横ずわりになって思わず溜息をついた。

「なにが……」

「あたし、なんだか悪い気がするんだもん。」

「馬鹿ね。あんた。」たえ子は声をあげて言った。「つまらぬことを気兼ねするもんじゃないわよ。あたしたちにはあたしたちの運命があるの。羨んだり妬んだりするのはこちらが間違いの。誰だって、こんな場所に一日だっていたくないはずよ。それがあたり前のことじゃない？ さあ。荷物をつくりなさいよ。」

促されてミツは戸棚をあけ、古いトランクを引きずりだした。だが荷物といってもこのトランクの中にわずかの下着や洋服をつめればそれで終わりだった。

「あのね。」

「なあに。」

「あなたにね。」

加納たえ子は自分の引き出しをあけて ② 銀色の指輪をとりだした。

「これ、あげたいんだけど。」

「あたしに……」眼をまるくしてミツは、「あたしに……」

「そうよ。」

「あたしに……なぜ、こんなもの呉れるの。」

「だって。」たえ子は哀しそうに微笑した。「もうあたしには用のないものですもの。それをはめて、始めての*₆リサイタルに出るはずだったの。でも、その指輪は病気のわたしには用はないわ。第一、それをはめる指が、こう歪んじやつたんですもの。」

たえ子は麻痺してまがった指に視線を落とした。うすら陽をあびたその姿からミツは思わず眼をそらした。

「ね、取っというよ。嫌でなかったら。」

「嫌なことなんか……あたし、こんな立派なもん……高いだろうなあ、こんな指輪。」

「じゃ、指にはめて。」

「本当？ 本当にくれるの？」

うなずいて、たえ子は指輪を縁ふちのすり切れた古トランクの上においた。

下着や^{*7}スエータを入れるとミツにはもうすることはなかった。時刻は既に昼近すでかった。もうすぐ作業場や畠はたけに出かけている患者たちが戻ってくるだろう。今日も昨日や一昨日と同じようにこの病舎では一日の営みが続けられるのだ。どんな世界にあっても、みすばらしい日常を人々は背負わねばならぬ。そしてそれが終わる時、雑木林のなかの泥どろによこれた墓地ぼちが彼等を待っていた。

「もう、出かける？」

「うん。」

二人はたがいの眼を見つめながら立ちあがった。

「送らないわよ。送ると辛いから。」

「うん……」

トランクを片手にミツは部屋の闕しきいで立ちどまった。たちどまったまま、小さな声で、

「さいなら。」

と呟つぶやいた。

「さよなら。」

加納たえ子はこちらに背をむけていたが、^③その背が泣いているのか、小刻みに震えるのがミツにも痛いほど、はっきりわかった。

ここに到着した日は^①霧雨が降っていたのに、同じようにトランクを片手にして病舎を出ていく今、空はミツの心のように^②あかるく晴れあがっていた。

病舎からバス路にいたる両側のアカシヤに風が吹いて、裏がえしになった葉は銀色にかがやいていた。栗林のかけから、小川のさわやかな音がきこえてくる。この栗林の前でミツはしゃがみこみ、修道女の一人に見つけられたのである。

小川を渡ると彼女はもう一度、病棟びやうどうの方角をふりかえった。小川が世間とあの悲惨ひさんな病舎とを隔へだてる境界線ならば、今、ミツはふたたび自由な世界に足をふみ入れることができたのである。

病棟からは何の物音もきこえなかった。修道女たちの住んでいる宿舎の煙突から黒い細い煙けむりが一すじ青空にのぼっていく。だが、静かなその内側に、どんな顔の人が生き、どんな生活をしているかをミツは知っていた、どんな苦しみやどんな眠れぬ夜があるかもミツは知っていた。（でも……もう、こっちに關係したことじゃないわ。）

バスの停留所で地面にトランクをおいて、彼女はわざと今、病院の方角を見ないように^④ふてくされた顔をしてみせた。同じようにバスを待っている二人の農婦が好奇心のこもった眼でミツを眺めまわしたからである。

（そんなに、見ないですよ。あの病院から来たんじゃない、ありませんからね。）ミツは心の中でその農婦たちに言いかけせる。（あんなとこの患者だと思わないでくださいよ。こっちは病氣じゃないんですからね。ウソだと思ったら聞いてきなさいよ。）

だが、その時、こちらに背をむけて肩を震わせながら泣くのを憶えていた加納たえ子の姿がミツの心に浮びあがった。細目にあけた窓ガラスから、ミツを羨望と妬みのこもる眼で眺めていた幾人かの女性患者の顔が浮びあがった。

その人たちは昨日まで、ミツにやさしく話しかけたり、刺繍を教えてくれたりした人たちだった。まるで今、それらの患者たちを裏切ったような痛さを胸に感じる。あたしは悪い女だと思い……

バスがくる間、うつむいて、靴の先で地面を丹念に掘っていた。

（中略）

三つ編みの髪をミツと同じように垂らした⑤土地の娘がトランクをさげてそのうしろに立っている。見送りにきた彼女の母親らしい中年女と弟らしい子供がその横で不安そうにあたりを見まわしながら、

「落とすんじゃないえぞ。切符を。」

「うん。」

「むこうの住所、ポケットに入れてあるだろな。」

娘がいくらうなずいても、母親は心配そうに風呂敷包を解いたり結んだりしている。

「ええか。叔父さんとこに葉書、だしときな。」

「わかってるよ。」

娘の頬はまだ林檎のように赤い。中学を出たばかりでこれから東京に就職にいくに違いない。

ミツは自分が始めて東京に出た時のことを思い出した。駅から汽車に乗る時、これと同じように送りにきた伯母がミツの風呂敷包を解いたり、結んだりした。この母親と同じように切符を落とすなどか、住所を忘れるなどか、列車がくるまでくどいほど繰り返したものである。

（この子、東京のどこで働くのかな。）

東京でこの娘がこれから送るであろう生活をミツは知っていた。田舎者と言われまいとして懸命に背伸びをしながら自分の一挙一動にもビクビクする毎日。一週に一度の休日、新宿や渋谷に出て驚くこと。星空をみてぼんやり弟や妹のことを思いだす夜。そして今日から自分もふたたび、その東京で昔と同じような一人ぼっちの生活を送らねばならぬのだ。

ミツは川崎の下宿の小さな冷たい部屋のことを思い出した。電燈の笠がないので、電氣がゆれるたびに部屋のなかに暗い縞の影がうつる。窓の下汚水のながれた路に酔客が放尿をしている。この娘ならそんな時、故郷の家のことや母親のことを考えることができるだろうが、家を

捨てたミツにはあたたかく思いたすものもない。天井をみあげて、うすい布団をあごまでかけながら、電燈の影がゆらゆらと揺れるのをじっと見ていただけだ。

戻っても孤独な生活がまた続くのだと言うことが今、ミツの胸にはっきりとわかってきた。捨てられた猫のように、一人だけでかじかんだ手を火種の乏しい火鉢におきながら送った去年の歳末の夜。電車の音が、割れ目を新聞紙で押さえたガラス窓を細かくゆらしていた。いやだ。もう、そんな生活はいやだ。

(でも、仕方ないもん。ほかに行くところがないもん。)

ミツは真実、今、自分の体を暖めてくれる人をそばに欲しかった。体だけではなく、時には寂寥としたこの毎日、疲れた自分が頭をそこにもたれさせる母親のような相手がほしかった。鈍い、愚かな自分の愚痴を聞いてくれる相手。石浜朗の映画を見る時、一緒になって笑える友だち。そしてその友だちが一生、自分のそばにいてくれ、離れていかなければいい。そんな暖かい存在が何処かにいないのか。

無駄とは知りながら彼女はこの駅のなかの人々を目で追った。だが誰もがこの古いトランクをぶらさげて、^①ぼんやりと立っている娘に*9一瞥も与えなかった。忙しそうに彼等は切符売場に近づき、改札口に並び、駅から外に出ていく。

「間もなく、二番線に東京行き、上り普通列車が……」

スピーカーから抑揚をつけた駅員の声がきこえてくる。ゆっくりと蒸気を吐きだして灰色の機関車と古ぼけた客車とがホームにすべりこんでくる。

東京に行く汽車。しかし東京とあの雑木林の宿舎と何処がちがうのだろう。人々は新宿でも川崎でもこの駅の中と同じように忙しく、つめたく、無関心にミツの横を通り過ぎていくだろう。たまに机をならべた人もあの*10三浦マリ子と同じように、やがてはミツのことを忘れて去っていくだろう。

改札口から客車におかかって駈けていく。席は充分あいているのに駈けないと乗り遅れると思うらしいのだ。さっきの三つ編みの娘が真ん中の窓から顔を出し、弟におかかって何かを言っている。

改札口にもたれてミツはその娘と母親と弟とをじっと眺めた。母親が大きな*11蝦蟇口から^②一枚の札をだして娘に渡してやっている。

発車をつげるベルがすり切れた音をたててなりはじめた。

(今、走ればいい。今、走ったら、まだ汽車に間にあう。)

彼女の心のなかにそう懸命に囁く声があった。と同時にもう一つの心の隅でミツは雨にふるえた雑木林と兵舎のような病棟のことを考えていた。自分が捨ててきたあの病棟では今、女患者たちは文化刺繍の作業を続けているだろう。加納たえ子は一人だけであの病室に坐っているかも知れぬ。ミツは胸がしめつけられるような気持ちで退院していく自分を眼で追っていた彼女たちの顔を思いうかべた。

ベルがやみ、しばらく沈黙が続き、汽車が鈍い音をたてて動きはじめた。機関車の煙が車輛にからみながら、ホームを流れていく。

^③ミツはトランクをもったまま駅の外に出た。そしてバスの停留所の方におかかって広場をゆっくりと横切った……

⑦ 森田さんじゃないの。」

スール・山形は眼をまるくして事務所の玄関にたっているミツを凝視した。

「え？ 汽車に乗り遅れたの？」

ミツは人の好きそうな例の笑いを顔いっぱいには浮べながら、

「ううん。」

首をふった。

「どうしたのよ。」

それでもスール・山形はミツの古トランクを受けとって誰もいない応接室に入った。茜色の西陽がガラス窓に反射している。

「どうしたのよ、本当に。」

今度は不安そうに修道女は娘の顔をみた。

「あたし、戻ってきちゃった。」

「まア……なぜ？」

「なぜって……」 ミツは恥ずかしそうに自分の気持ちを表現する言葉に口ごもりながら、

「なぜって……」

それからすねたように机の上に指で何か字を書いた。

「どこに行ったって……結局、同じだしさ。」

「でも……ここは病院でしょ。病気の患者さんたちのいる所じゃないの。」

「あたし、もう、こわくないな。始めはそりやイヤだったけど、馴れちゃったから。」

「こわくなくなっちゃって……もう患者でもないあなたが。」とスール・山形は困惑の表情をみせて、

「居る所じゃないわ。患者でない人、あなたたちには住む世界があるでしょ。病気や苦しみしかない場所にわざわざ住みつく必要はないのよ。」

「だって、あんただって……ここに居るじゃない。」

その声はあまりに無邪気だったので修道女は驚いたように顔をあげた。

「あたしは……あたしたち修道女は……病人の世話をしたり、友だちになるのが一生の仕事だから。」

「じゃ、あたしも患者の世話をする。ここで働いたら、いけないですか。」

「冗談じゃないわよ。森田さん。」

少し、きつくなってスール・山形は椅子から立ち上った。

「一時の感傷や出来心から、そんなことを口に出しちゃ駄目よ。この病院にも時々、そんな*12おセンチな申し込みをしてくる女学生がいるわ。」

でも一度、この病院にきて、患者さんたちの姿を見たり、^{しゃが}嘸れ声をきく時、^{あお}蒼くなって逃げだすのよ。」

「あたしはもう、そんな声をきいたわ。」

ミツは膝の上に手を組み合わせながら笑ってみせた。なぜ、スール・山形が自分を迷惑がるのか今、彼女にはわからなくなったぐらいである。でも、あたしが残っちゃ、いけないと言ふなら帰るけど……」

「いけないってわけじゃないけど。」

修道女はほとほと困った顔をして、

「でもあんたの親御さんたちが。」

「父ちゃんならいいの。あたしもう一人で長い間、生活してきたんだもの。」

「困ったわねえ……じゃ今晚一晚、ゆっくりもう一度、考えて頂戴。一時の気持ちだっということがきつとよくわかるはず。そして明日は東京に戻るのね。わかった？」

ミツは微笑してうなずいた。修道女はどうして問題を複雑にするのであろう。しかし兎も角も一晚だけこの病院に残ることを許してくれたのだ。一晚は二晩になり二晩は一週間になるだろう。

「加納さんは？」

「え？」

「たえ子さん、どこにいるう？」

「ああ。」スール・山形は立ちあがって窓ガラスをあけながら、「あなたが帰ったので随分、しょんぼりしていたけど……さっき畠のほうを歩いていたわ。」

「行っている？」

「もちろんよ。」

ミツは急いで事務室を飛びだした。病棟と病棟との間の中庭をぬけ、雑木林のふちにそって傾斜地をおりると畠に出るはずだった。

雲の間から幾条かの夕陽の光が束のように林と傾斜地とにふり注いでいた。その畠で三人の患者が働いている姿が豆粒のように小さく見える。

ミツはその落日の光を背にうけながら、^⑧林のふちに立ちどまった。あれほど嫌悪をもつて眺めたこの風景がミツには今、自分の故郷に戻ったような懐かしさを起こさせた。林の一本の樹にもたれて森田ミツはその懐かしさを心の中で噛みしめながら、夕陽の光の束を見あげた。

(遠藤周作『わたしが・棄てた・女』)

(注) *1 ハンセン病……らい菌と呼ばれる細菌に感染することによって顔や手足の皮膚の変形や神経障害を引き起こす病気のこと。現在、適

切な治療と特效薬によって完全に治るものであるが、この小説の時代背景をふくめ不治の病として偏見の対象とされてきた経緯がある。

*2 娑婆……自由な外の一般の社会。

*3 羨望……うらやましく思うこと。

*4 忍従……がまんして従うこと。

*5 スール……カトリック教会に属する修道女（共同生活する女性）の呼び名。

*6 リサイタル……ここでは、ピアノの独奏会を指す。

*7 スエータ……セーター。

*8 寂寞……ひっそりとしてさびしいさま。

*9 一瞥……ちらりと見ること。

*10 三浦マリ子……以前ミツと同じ工場で事務員をしていた美しい女性。

*11 蝦蟇口……口金のついた袋形の銭入れ、さいふ。

*12 おセンチ……感じやすく涙もろいさま。

問一 ——線部①「ミツが退院する」とありますが、このことについて次の(1)・(2)の問いにそれぞれ答えなさい。

(1) ハンセン病ではないことが判明し、療養施設を退院するミツは、どのような心情でいましたか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 精密検査の結果を知ってうれしさがあふれているが、その後の自分の将来への高まる不安の気持ちを他の患者たちへ隠したいと思っている。

イ 誤診に対する怒りやくやしさを感じつつも、療養施設の隔離生活で築いた仲間との絆を大切に、今後の未来の生活に向けた希望を抱いている。

ウ ハンセン病の疑いが解けて安心し、新たな生活に胸をふくらませる一方、ともに過ごした他の患者たちとの間に複雑な思いを感じている。

エ 誤診が判明したことで自分の価値や存在意義を肯定的にとらえる感情を取りもどし、隔離生活の孤独に打ち勝ったことを喜んでいる。

(2) 療養施設の登場人物たちに焦点をあてたとき、その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 共感を示す患者たちはミツの退院を喜びながらも、自分の将来の不安を抱えざるを得ないが、ねたみにとらわれる患者たちはミツを敵視するあまり、自分たちの居場所を失ってしまっている。

イ 共感を示す患者たちはミツの精神的な成長を支えるだけでなく、自分たちも退院に向けた努力をするが、一方、ねたみにとらわれる患者たちは自分の未熟さに気づけず、結果的に孤立してしまっている。

ウ 共感を示す患者たちはしあわせだった過去の自分と重ね合わせ、ミツの自由を祝福しているが、ねたみにとらわれる患者たちは自分と他人との幸福度合いを比較することによって、自尊心を保とうとしている。

エ 共感を示す患者たちはミツをはげましながらもみずからの境遇と向き合い、そのつらさに耐えようとするが、一方、ねたみにとらわれる患者たちはミツの自由を喜べず、反感的な姿勢をあらわにしている。

問二 ―線部②「銀色の指輪」とありますが、この物語の中でどのような意味をあらわすものとして描かれていますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 加納たえ子の孤独と閉ざされた未来の輝きを暗示的に象徴しており、また、自分が全うすることができなかったリサイタルの夢を自分の代わりにミツに実現してもらいたいと願う思いが託された、まさに闇と光を示している。

イ 加納たえ子の人生の目標はかなえられないというきびしい現実を強調する役割を持つとともに、親密な関係を築けたミツの今後の生活を案じ、唯一、自分が贈ることができる高価な品として位置づけられた、まさに現実と理想を示している。

ウ 加納たえ子にとって夢の実現を不可能にしてしまった過去のあやまちと、今の現実を受け入れられない自分の甘えを断ち切る道具としてイメージされながら、ミツの将来を明るく光らせるものとしても示された、いわゆる決断と祝福を具体化している。

エ 加納たえ子にとってリサイタルで晴れやかに演奏する夢との決別を示すとともに、ミツとの友情の深まりのあかしでもあり、自分のかなえられなかった人生の喜びを託す思いが込められた、いわば葛藤と希望を象徴している。

問三 ―線部③「その背が泣いているのか、小刻みに震える」とありますが、加納たえ子はなぜこのような様子をしていたのでしょうか。その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ミツの退院を心から祝福する一方、隔絶された病舎に残り続けなければいけないことへのつらさや悲しみがこらえきれずにいたから。

イ 姉妹のような親しい関係を築くことができたミツが病気ではなかったことを心の底からうれしく思い、退院する姿に感極まってしまったから。

ウ 平常心を保ちながら一生懸命に笑顔で退院を祝福していたが、思わぬ運命によってミツに裏切られることになってしまった結末に、悲しみを感じずにはいらなかったから。

エ ミツとは短い期間でありながらも親密な友情関係を築くことができたと思っていたが、自分の深い苦しみまでは理解してもらえず、そのもどかしさを感じたから。

問四

——線部④「ふてくされた顔をしてみせた」とありますが、ミツのこのような態度の意味や理由はどのようなこととして読み取ることができるでしょうか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 停留所でバスを待つミツが旅行にでも行くようなトランクを持っていることに好奇の目で眺めまわした農婦たちに対して、誤った見方で自分が見られていることが恥ずかしく感じ、自分は旅行に行こうとしているわけではないということをささやかに伝えようとしていることが読み取れる。

イ 停留所でバスを待つミツに好奇の目を向けている農婦たちに対して反発心をあえて示そうとしているからであるが、同時に社会と隔絶して生きている患者に対して、かたよった思いをミツ自身も宿していたことが読み取れる。

ウ 病舎で生活する患者たちがどれほど苦しい日々を過ごしているかをまったく知りもしない農婦たちに対して、怒りの気持ちを表情にあらわしたからであるが、こうすることによってミツ自身も農婦たちと同じように何の不自由もない生活に戻ってきたことが読み取れる。

エ バスの停留所まで来てみると退院するときに向けられた患者たちからの心ない敵意が思い出され、療養施設と自分は関わりがないことをあらわしたかったからであり、同時にそんなミツの思いを理解しない農婦たちへの釈然とし^{しゃくぜん}ない怒りがわき起こっていたことが読み取れる。

問五

——線部⑤「土地の娘」とありますが、東京へ就職にいくであろうこの娘の姿を目にしながら、ミツはどのようなことを感じたり考えたりしていますか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 土地の娘の母親や弟が見送りに来ている様子をながめているミツは、自分をはじめて東京へ就職するために汽車に乗るときにも伯母から切符を落としてはいけないことや、行先の住所を忘れてはいけないことなどのさまざまな注意を受けたことを思い出し、人生の出発点では細やかな注意を払^{はら}わなければならないという戒^{いまし}めをあらためて感じている。

イ 中学を出たばかりにもかかわらず社会人としての生活を東京で過ごしていかなければいけない土地の娘に対して、ミツはどのような生活が待っているかを知っているだけに、温かいまなざしでこれからの前途^{ぜんと}を見守ると同時に、自分自身に対してもがんばって人生を切り開かなければいけないことを強く自覚している。

ウ ミツは今まさに故郷を離れようとする土地の娘の姿と自分とを重ねながら、その後待ち受けるであろう貧しくさびしい生活をうれえて心配しているが、それでも土地の娘は故郷や家族を温かみのある心のより所としていけるのに、家族との関わりを絶った自分にはそのようなものもないという孤立感をいっそう深めている。

エ たった一人きりで頼る家族も友人もいなかった東京での生活を過ごしていたミツは、これから東京行きの汽車に乗ろうとしている土地の娘と自分の境遇があまりにも重なるため、一緒に汽車を乗り合わせることにによって少しでも関係性を築き、知り合いになっていくべきかどうかを真剣に考えている。

問六 ―線部⑥「ミツはトランクをもったまま駅の外に出た」とありますが、ミツはどうして駅の外に出たのですか。次から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア だれにも心配されることもなくひとりぼっちで生きるミツは、退院してきた病院の患者たちもまた孤独の中で生きざるを得ない苦しみを抱えていることをよく知り、その思いが心の中に呼び起こされ、病院へ戻ろうと思ったから。

イ ハンセン病をわずらっていたことが何よりもうれしかったので、いまだ病気を抱える不幸な患者たちに自分の幸せを少しでも分けてあげたいという感情が心の中にわき起こり、病院へ戻ろうと思ったから。

ウ 駅で過去のさまざまな記憶がよみがえる中、社会に対して有益なことを何もしてこなかった自分を反省し、この先は看護の仕事で社会貢献していくこうとする思いが高まり、病院へ戻ろうと思ったから。

エ 退院してみたものの東京に行ったところで生活の基盤はすでに失われているので、それならば慣れ親しんだ場所で生活の安定をはかって生きていくことがよいと考え、病院へ戻ろうと思ったから。

問七 ―線部⑦「森田さんじゃないの」とありますが、病院に戻ってきたミツに対して、スール・山形が示した態度として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 病院に戻る理由がどのような考えに基づくものであれ、責任者として信念をもって許可できないことを言明している。

イ ミツがなぜ病院に戻ってきたのかを心の中ではよく理解していて、母親や姉のように優しく寄りそっている。

ウ ミツは人生を前向きに生きる姿勢がやや欠けているので、現実的な東京での生活をまじめに考えさせようとしている。

エ 病院で生活する理由がないことやその苦しさを諭しながらも、ミツの意見を尊重し、その決定を待とうとしている。

問八——線部⑧「林のふちに立ちどまった」とありますが、このときのミツの心情として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 夕陽の光が束のように林と傾斜地とにふり注ぎ、自然が生み出す美しい光景に心から感動している。
イ 畠で働く患者たちの姿を見て、心を寄せることができる場所に帰ったような情緒的な気持ちになっている。
ウ 夕刻まで懸命に畠で働く患者たちに感動して、いち早く仕事を手伝いたいとわくわくしている。
エ 農作業の過酷な経験が思い出されたが、この嫌悪感を克服することで過去の自分から抜け出す決意をしている。

問九 次の1～5について、本文の表現や内容の説明として正しいものは「○」で、正しくないものは「×」で答えなさい。なお、すべて同じ答えに はいけません。

1 線部①「霧雨が降っていた」や、②「あかるく晴れあがっていた」という天候の情景描写には、ミツのその時の心情が反映されている。

2 線部③「靴の先で地面を丹念に掘っていた」という表現には、ミツの、東京へ戻ることに積極的でない気持ちと、冷やかな視線を向けた患者たちを許そうかどうするかに悩む思いが同時にあらわされている。

3 線部④「ぼんやりと立っている娘」という表現には、「ミツ」という具体的な固有名詞から「娘」という一般名詞が用いられていて、より孤独でより存在が小さいことが印象づけられている。

4 線部⑤「一枚の札をだして娘に渡してやっている」という表現には、東京行きの汽車の切符を落とさず大切に持って行きなさいと、思う母親の精一杯の愛情があらわされている。

5 この物語は「ミツ」という登場人物の一人称で描かれており、文章中にくり返し出てくる「（ ）」は、「ミツ」の心の声を率直にあらわす表現として効果的に用いられている。

問十 この物語を読んだ生徒たち（A～D）の感想を読み、

1

・

2

にあてはまる語句として最もふさわしいものを後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

【Aさん】 この物語は登場人物のミツがハンセン病によって身体的にも精神的にも苦しむ人々と接したことによって、みずからの置かれた状況に思いをめぐらせ、さまざまな迷いや悩みの末に、これからの生き方を決断しようとしているものですね。

【Bくん】 そうだね。ミツは自分も病気であるかもしれない不安を感じていたんだろうけれど、その背景の一つには、ハンセン病に対する社会的な偏見があったことが推察できるね。病院を退院するときはミツ自身にもわだかまりがあったことを感じさせる描写もあり、そんな自分が許せなくて悩み苦しんでいたことが伝わってきたね。

【Cさん】

それにしても、ミツが病院に戻ったのはなぜだったんだろう？ ハンセン病の苦しみの中にいる患者たちへの 1 からかな。あるいは世の中の不幸に対して自分のできることで奉仕しようと考えたのかな。

【Dさん】

わたしはCさんが考えた理由とはちがった感想を持ったのだけれど、ミツは患者たちに対して共感する気持ちがあったからじゃないかなと思うわ。患者たちは病気そのものの苦しさ以上に、ほかの病気とはちがってひとりぼっちの不幸を抱えている。ミツもまた頼る家族も愛してくれる人もいない孤独の中にいる。ミツは 2 を選んだんじゃないかなと思ったわ。あるいは、そうせざるを得ない感情を持つ女性とも言えるかもしれない。

【Cさん】

なるほど。わたしはこの物語の続きも読んだけれど、スール・山形が書いた手紙にこんな一節があったわ、「自分一人だけが苦しんでいるという気持ちほど、希望のないものはございません。しかし、このことをミツちゃんにどう、わかってもらえるか。いいえ、ミツちゃんはその苦しみの連帯を、自分の人生で知らずに実践していたのです」と。Dさんの意見は、この手紙の一節の内容と重なり、この物語をより深くとらえることにつながったわ。

1

ア 激励^{げきれい}の気持ちや、生活を支援^{しえん}する気持ち

イ あわれみの気持ちや、同情する気持ち

ウ あこがれの気持ちや、理想とする気持ち

エ 感謝する気持ちや、敬愛する気持ち

2

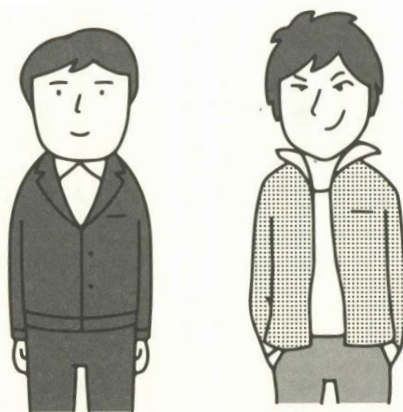
ア ほかの人のあたたかな愛情で、自分の孤独を包んでもらおうとする生き方

イ 自分が笑顔を生みだすことで、ほかの人の苦しみを和^{やわ}らげようとする生き方

ウ ほかの人の不幸に自分の不幸を重ねて、手を差しのべようとする生き方

エ ほかの人の孤独や世の中の不幸を取りのぞき、しあわせな風を吹きこもうとする生き方

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を一部省略しています。）



「能力の高い男性はどちらだと思いますか」

印象判断における重要次元——「能力の高さ」と「温かさ」

さて、私たちはいろいろな言葉を使って個人や集団に抱く印象を表現できます。^{*1} ポジティブなものでいうと、優しそう、器用そう、親切そう、^{*2} ネガティブなものとしては、だらしがなさそう、不真面目そう、無礼そう、など、他にもたくさん挙げることができます。ただし、さまざまな表現がある中で、私たちは「能力の高さ」、「温かさ」という2つの次元を基準に、人や集団に対する印象を形成しやすいことが示されています。

この2つの次元の重要性をみなさんにも実感してもらうために、まずは「能力の高さ」と「温かさ」に基づいた判断を経験してもらうことにしましょう。上の2つのイラストを見てみてください。左右ともに、20～30代の男性でしょうか。ここで、「能力が高い男性はどちらだと思いますか」、と聞かれたら、あなたはどちらを選びますか？ 深く考える必要はないので、ぱっと頭に思いついた方を選んでください。続いて、「温かいのはどちらだと思いますか」、と聞かれた場合も考えてみてください。

この質問を授業などで行うと、ほとんどの場面において、多くの人が、^① 右側の男性よりも左側のイラストの男性を「能力が高く」、「温かい」と判断します。よくよく考えたら、^② 不思議です。ただのイラストで、実在する人物ではありません。また、このイラストの男性たちが具体的にどのような行動傾向や性格上の特徴を持っているのか、まったく情報が提供されていません。

本来であれば、能力の高さや温かさについて聞かれたら、半分の人が左側、残りの半分の人が右側の男性を選択するような、いわゆる当てずっぽうでみんなが選んだ場合に示される結果がでておかしくありません。しかし、この質問をすると、毎回 **A** して、一方に偏った結果になるのです。これはつまり、私たちが「能力の高さ」と「温かさ」に関して共通したイメージを持ち、そのイメージをもとに他者の第一印象（外見）を判断していることを意味しています。

能力の高さと温かさの判断には、相補性があることもわかっています。相補性とは、一方が多くなると、もう片方が少なくなるような関係（お互いがお互いを補いあうイメージ）のことを言います。ジャッドたち（Judd et al. 2006）が行った^③ いくつかの研究では、集団に対する印象形成の文脈から能力の高さと温かさの相補的な役割が **B** されています。

彼らは第一の研究で、まずは研究参加者に「緑組」と「青組」の集団の特徴について書かれた情報を読んでもらいました。一方の集団の方が能力は高いけれど、どちらの集団も同程度に「温かい」ことを示す内容でした。つまり呈示された情報に基づくと、緑組と青組には、能力

の高さには違いがあるものの、温かさには違いはない、ということになります。そのような情報を呈示した上で、2つの集団の「能力の高さ」と「温かさ」について、その程度を回答するように求めました。**C**、能力の高さに関しては、呈示した情報と一貫して、「能力が高い」と説明された集団の方が、もう一方の集団よりも能力が高いと評価されました。

ここまではある意味当たり前の結果で、面白いのはここからです。「温かさ」に関しては、2つの集団で情報に差をつけていません。したがって、情報通りに評価されれば、2つの集団でその程度に違いは見られないはずですが、**D**の結果は異なるものでした。「能力が高い」と描写した集団ではない、もう一方の集団の方が、より「温かい」と評価されたのです。

続く第二の研究では、「能力の高さ」と「温かさ」を入れ替えてみました。つまり、「温かさ」に関しては、一方の集団がより温かいけれど、「能力の高さ」はどちらの集団も同程度になるような情報を呈示しました。その後、1つ目の研究と同様に、2つの集団の能力の高さと温かさの程度をそれぞれ評価してもらいました。すると今度は、温かさの評価に関しては、呈示した情報と一貫して、一方の集団の方がもう一方の集団よりも「温かい」と評価されました。しかし、能力の高さに関しては、温かさの得点が低い集団の方が、より「能力が高い」と評価されました。

この2つの研究から、能力が高いと冷たい、温かいと能力が低いと評価されるという、2つの次元の相補的な関係性が見いだされたのです。ちなみに、温かく能力が高い人と、冷たく能力が高い人では、後者、つまり冷たく能力が高い人の方が、より「能力が高い」と評価されることも別の研究で示されています。

ステレオタイプ内容モデル

能力の高さと温かさの二次元の組み合わせに基づいて、さまざまな社会集団が*³ カテゴリー化され、*⁴ ステレオタイプの理解がなされることもわかっています。そして、そのような理解がなされる社会集団に対して人が抱きやすい感情、つまり*⁵ 偏見についても整理されています。ステレオタイプ内容モデルをもとに作成した表4-1をご覧ください。

まず、能力が高く温かい集団とは、自分にとっての仲間に分類される人々です。同じ部活のメンバーや、同盟国の人々などがそれに当たります。このような社会集団に対しては、賞賛や誇らしさといった感情が伴うため、差別につながるような偏見は生じにくいと考えていいでしょう。一方、能力が低く冷たい集団としては、薬物中毒者や犯罪者が該当します。このカテゴリーに分類される社会集団には嫌悪や敵意の感情が抱かれやすく、それは侮蔑的な偏見につながります。現代において、能力が低く冷たいと認識されるような社会集団を形成する人々は相対的に少なく、日常で接触する機会は限られています。

		能力	
		低い	高い
温かさ	冷たい	1 侮蔑 ^{ぶべつ} 的 ^{へんけん} の偏見 ^{へんけん} ／ステレオタイプ 2 侮蔑 ^{けんお} 、嫌悪 ^{けんお} 、 E 、敵意 (例: 貧困層、薬物中毒者、犯罪者)	1 羨望 ^{せんぼう} 的 ^{せんぼう} の偏見 ^{へんけん} ／ステレオタイプ 2 妬み ^{ねた} 、ジェラシー (例: アジア人、ユダヤ人、お金持ち、フェミニスト)
	温かい	1 温情主義 ^{じやうしやう} 的 ^{じやうしやう} (家父長 ^{かふちやう} 的 ^{てき}) の偏見 ^{へんけん} ／ステレオタイプ 2 同情・共感 ^{きかん} (例: 高齢 ^{かうれい} 者、障がい者、主婦)	1 賞賛 ^{しょうさん} (問題となりうる偏見やステレオタイプなし) 2 F 、賞賛 (例: 内集団、同盟国…いわゆる、仲間)

表4-1 ステレオタイプ内容モデル (Fisk, et al, (2002) を参考で作成)

※1: 偏見やステレオタイプ / 2: 生じる感情

能力の高さと温かさの組み合わせにおいて、どちらか一方が高く、もう一方が低くなるような社会集団は両面価値的な人たちであると言えます。能力が高く冷たい集団には、アジア人、ユダヤ人、お金持ち、フェミニストといった社会集団が分類されます。これらの社会集団には、妬み感情が生じやすいことがわかっています。また、能力が低く温かい集団としては高齢者や障がい者、主婦が含まれ、同情や共感といった感情が生じます。

両面価値的な特徴を持つ社会集団に属する人たちとは、自分が仲間に対してするような直接的で親密なコミュニケーションを行う機会は少ないかもしれません。しかし、非対面でのコミュニケーションや、テレビのニュースやさまざまなメディアコンテンツを通じた接触の機会はあります。

事件や事故のニュースでは、被害者や加害者が属する社会集団の種類によって印象が変わることもあります。例を挙げると、傷害事件や交通事故の加害者が裕福で社会的地位の高い人だった場合、そのような人に対して抱かれがちな④妬み感情が、より加害者の非人間化を強めるかもしれません。また、被害者が高齢者や女性だった場合は、より一層、同情や共感の感情が生じるかもしれません。しらすしらすのうちに、私たちは*7属性情報のステレオタイプや偏見に基づいた印象や憶測をしてしまっているかもしれないという点には、自覚的でありたいです。

(中略)

⑤ 偏見や差別を少なくするには

⑤ どうすれば偏見や差別を減らせるでしょうか。偏見や差別の源泉となるステレオタイプを通じた情報処理は、私たちが生活する上で必要不可欠だという話をしました。また、私たちは世界のあらゆる社会集団と直接コミュニケーションをとることは不可能ですから、偏見を完全になくすというのも難しいでしょう。したがって、実質的に不利益を被る人をできるだけ少なくするという視点に立つとしたら、まずは私たちの心の中にあるステレオタイプや偏見を、差別という形で表に出さないうというのがひとつの方向性であろうと考えられます。

特に「ことば」に関しては、そのほとんどが意識的、意図的に発信されるものです。ですから、差別的な発言をしないように、少なくとも気をつけようとすることはできるはずです。ただし、それはいってもなかなか自分一人では難しい、と感じる人もいるかもしれません。そこで、差別は良

くないという社会規範を*8醸成する*9コミュニティレベルでの取り組みや、差別の*10抑制を目指した社会制度の出番です。差別が許されない「状況」に取り囲まれることで、発言をコントロールできるようになる人たちが増える可能性は高まるでしょう。

同時に、特定の社会集団に対するステレオタイプや偏見を心の中で極力芽生えさせない、そしてそれを大きく成長させないことも重要です。1950年代から継続して進められている偏見の低減を目指した研究では、さまざまな社会集団の人たちとさまざまな形で触れ合うことに一定の効果を見出しています。*11泥棒洞窟実験のときのように、単に触れ合うだけではなく、そこに共通の上位目標を設定できればなお良いです。直接対面でやり取りする以外にも、間接的に話を聞いたり、メディアを使った情報収集も「触れ合い」にあたります。ですから、広告などの影響力のある*12媒体が逆効果の情報を発信しないことには意味があるのです。

近年では、自分たちがよく知らない「あの人たち」、つまり外集団が、みな同じような人たちで構成されているわけではなく、多くの異なる特徴を持つ人たちのだと理解する方法で偏見を低減させるアプローチも注目されています。また、偏見を抑制する目的で行われる介入やアプローチは、小学生から大学生と、教育を受けている真っ只中の人たちに対して、より効果を発揮するようです。

私と息子の経験を少しお話しします。新型コロナウイルスによる行動制限がかかるより以前に、アメリカのポートランドで行われた学会に当時小学校2年生だった息子連れて参加しました。私にとっては久しぶりのアメリカ、息子にとっては初めてのです。ホテル近くのスーパーマーケットまでの道すがら、ホームレスとおぼしき人が、1人地面に座って何かぶつぶつと言っているのが見えました。2月のまだとても寒い時期です。通り過ぎる際に、案の定といっては悲しいですが、人種差別的な言葉を浴びせられました。これまでの経験から、何か言われてもとにかく目をあわせない、無視する、という方法をとることを決めており、幸いそれ以上何か危害を加えられることはありませんでした。

しかし息子は「あの何人？」と、何か起こったのか、よくわかっていない様子でした。そこで、アメリカにおけるホームレスや人種差別の問題について少し話をしました。息子は「でも、いい人たちもいっぱいいたね」と返してきました。たしかに、機内でトイレを譲ってくれた人、スーパーマーケットでハイタッチしてくれた店員さん、テイクアウトのハンバーガーができるまでにこれどうぞ、とポテトがたくさん入ったカップを渡してくれた店員さんと、優しくしてもらった経験をこの一件の前にたくさんしていました。息子にはそちらの方が強く印象に残っていたようです。

さて、このエピソードに出てきた「アメリカ人」について、私はあえて、人種や性別、年齢といった属性情報を示しませんでした。でもおそらくみなさんは、これまでの経験や知識などから属性情報を頭で補ってその場面をイメージしたのではないのでしょうか。それがまさに、ステレオタイプや偏見です。1人だけ実際の属性情報を追加しますと、スーパーマーケットで息子とハイタッチしてくれた店員さんは、白人の高齢男性でした。⑥みなさんの頭の中のイメージと一致していましたか？

繰り返になりますが、偏見や差別の問題は大変複雑で、何か1つの解決方法があるわけではありません。良かれと思ってしたことすら、効果が得られない場合もあるでしょう。また、偏見を抑制するために開発されたアプローチが、長期にわたって効果を発揮するのかどうかという点については、まだ十分なデータが揃っていない段階です。

しかし、同じカテゴリーに属する人（息子の経験の場合、アメリカ人）だからといって、全員が同じように振る舞うわけではないということを実際に経験したり、学習したりすることは、偏見の低減に少なからず役立つ可能性はありそうだと、私自身は感じました。自分とは異なる社会集団の存在を早い時期から知り、また、そのような社会集団にも多様な人たちが存在するのだと理解する努力をこつこつと続けていくことが何よりも大切なのではないかと思います。

（村山 綾『心のクセ』に気づくには 社会心理学から考える）

（注） *1 ポジティブ……積極的。

*2 ネガティブ……消極的。

*3 カテゴリー化……分類すること。

*4 ステレオタイプ……多くの人に広まっている先入観。

*5 偏見……かたよった見方。思い込み。

*6 メディアコンテンツ……新聞やインターネット等で発信する情報。

*7 属性情報……その物が持ち合わせている特性の内容。

*8 醸成する……ある状況を作り出す。

*9 コミュニティレベル……地域社会の段階。

*10 抑制……おさえとどめること。

*11 泥棒洞窟実験……1954年に行われた実験。この実験結果から、たまたま振り分けられた集団でも同じ集団のメンバーには仲間意識を、異なる集団のメンバーには敵対感情を持ちやすく、お互いの関係性の改善には両集団が協力することで解決できるような目標設定が有効であるということが示された。

*12 媒体……伝達する際の手段。

問一

——線部①「右側の男性よりも左側のイラストの男性を『能力が高く』、『温かい』と判断します」とありますが、なぜそのように判断するのですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 左側の男性を右側の男性よりも「能力が高い」と多くの人が深く考えずに思いつきで答えてしまうのは、物事を選ぶための時間がもたないと考えているから。

イ 左側の男性を右側の男性よりも「温かい」と思っているのは、多くの人が「実際はそうとも限らない」という判断基準を大切にしているから。

ウ 「能力の高さ」と「温かさ」に関して多くの人が共通したイメージを抱き、人びとはそのイメージに基づいて他者の第一印象を決める傾向があるから。

エ 「能力の高さ」と「温かさ」は他者の印象を決める重要な特徴だが、多くの人は自分で決めず、他の人の判断を優先して周囲との和を大切にしようとするから。

問二

——線部②「不思議」とありますが、何に対して不思議なのですか。このことにふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多くの人が2つのイラストをじっくりと見ることなく、自然と半数ずつにイラストを選択していることに対して。

イ 多くの人が2つのイラストから得られる情報だけで判断し、同じイラストを選んでしまうことに対して。

ウ イラストの2人の男性たちは実在する人物ではなく、判断材料が少ないなか、多くの人が一方を選択することに対して。

エ イラストの2人の男性たちの日常の言動や性格を知らずに、多くの人が同じ一方を選んでしまうことに対して。

問三

ア A ・ B にあてはまる言葉として最もふさわしい組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

ア A 判断 ・ B 回答

イ A 判断 ・ B 提供

ウ A 一貫 ・ B 実感

エ A 一貫 ・ B 検証

問四

ア C ・ D にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 一方 イ しかし ウ そのうえ

エ つまり オ すると

問五——線部③「いくつかの研究」とありますが、この研究についての説明としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 第一の研究では2つの集団の一方は能力が高いが、温かさは2つの集団にはほぼ差がないという特徴を、情報として事前に研究参加者には伝えていた。

イ 第一の研究では2つの集団は温かさはほぼ同じであるという情報を呈示したにもかかわらず、研究参加者は2つの集団の温かさには差があると評価した。

ウ 第二の研究では研究参加者に温かさが低いと評価された集団は、事前に呈示した情報と同様に、他方より「能力が高い」と評価された。
エ 第二の研究では2つの集団の能力の高さには違いはなく、一方の集団が他方より温かいという情報を呈示したところ、研究参加者は情報とは異なる評価をした。

問六 表4-1の

E	F
---	---

 に入る言葉として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 優しさ イ マイペース ウ プライド
エ 怒り オ 公平

問七——線部④「妬み感情が、より加害者の非人間化を強めるかもしれません」とありますが、これはどのようなことだと考えられるでしょうか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 私たちが、加害者は社会的地位により優遇されるのに違いないと思ひ込み、責め立てたいという気持ちを正当化しようと思うこと。
イ 私たちが、加害者の社会的地位があまりにも低いので、自分はこのような人間にならないようにしようと思うこと。

ウ 私たちが、加害者を同じ人間ではなく憧れの理想像と見なすことで、自分には手の届かない存在として位置づけようとする事。
エ 私たちが、加害者と自分を同等の人間ではないと見なすことで、今の地位や財産に対して無理やりにも満足しようとする事。

問八——線部⑤「どうすれば偏見や差別を減らせるでしょうか」とありますが、筆者の考えとしてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア それぞれの心にある個人や集団に対して感じるさまざまな印象を、差別や偏見という言葉で社会に表現するべきではない。
イ 意図的に発信することばの使い方にそれぞれが注意し、差別的な発言をしないように気をつけるべきである。

ウ さまざまな社会集団の人たちと触れ合うことや、共通の目標を持って行動するという経験をするべきである。
エ ステレオタイプによる情報処理はやめることはできないが、社会の仕組みを変え、他者との触れ合いを減らすべきである。

問九 ―線部⑥「みなさんの頭の中のイメージと一致していましたか？」とありますが、筆者はこの問いかけでどのようなことを読者に伝えたいと考えられますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア スーパーマーケットの店員さんについての属性情報を、読み手が無意識のうちに思い込みで判断をしてしまうことへの注意。
イ スーパーマーケットの店員さんについての属性情報を示したことで、読み手が自由に発想をできなくなってしまうことへのおわび。
ウ ハイタッチをするアメリカ人という情報に読み手が頼らず、これまでの経験を生かして判断することへのほげまし。
エ 読み手が偏見による物の見方であったとしても、白人の高齢男性という真実に自力でたどり着くことができたことへの称賛。

問十 次の1～4について、本文に述べられている内容として正しいものは「○」で、正しくないものは「×」で答えなさい。なお、すべて同じ答えにはいけません。

- 1 日常生活において情報を処理する際に、ステレオタイプの理解は必要不可欠なので、多少の偏見や差別はやむを得ないことである。
- 2 様々な社会集団の存在を子ども頃より知ることが必要であり、同じ社会集団にも多様な人たちが存在することを理解するように努めるべきである。
- 3 ジャッドたちの研究では、温かさや能力の高さには相補性があり、温かければ温かいほど能力は高い集団と低い集団の二極化が目立つという結果がみられた。
- 4 ステレオタイプの理解は、自分と同じ属性を共有しない「あの人たち」がどのような人たちであるのかを認識することを可能にし、偏見を低減させることにおいて有効である。

(お わ り)

受験番号			
			番

氏 名

得 点
※

※には何も書かないこと

一

問一	
⑥	①
⑦	②
ぐ	
⑧	③
⑨	る
⑩	⑤
	ば

問二
①
②
③

問三
問四
①
②
③
④

問五
(1)
(2)
(3)

二

問一
(1)
(2)
問二
問三

※

問四
問五
問六

問七
問八
問九
1
2
3
4
5

※

三

問一
問二
問三

問四
C
D
問五

問六
E
F
問七

問八
問九

問十
1
2
3
4

※